

## ダルエスサラームのゴミ問題(調査員レポート)

著者	池野 旬
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1992-03
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00008600">http://hdl.handle.net/2344/00008600</a>

## ゴミ問題

### ■■池野 旬

ダルエスサラームの人口規模は急速に増大している。ダルエスサラーム「市」の存在するダルエスサラーム「州」の人口は、1967年35万6286人、78年84万3090人、88年には136万850人となった。20年間に4倍に増大した人口に、都市機能の整備は十分に対応しきれていない。その現われの一つにゴミ問題がある。

#### ゴミ収集問題

一昨年10月の総選挙後、急遽呼び返されて駐英大使から第一副大統領兼首相に就任したマレチェラ氏は、昨年1月にダルエスサラーム市清掃作戦を命じた。市当局、州当局あるいは担当省庁の作業状況について我慢ができなくなったの、鶴の一声であろう。首相発言直後には、よくゴミ収集車を街中で見かけた。これは望ましい現象であるが、ゴミ収集車のフル稼働は別の問題を発生させた。

ダルエスサラーム市の目抜き通りサモラ・アベニューでは道の片端に縦列駐車がなされている。そのため、片側1車線を確保するのがやっとのスペースしか残されていない。そのうえ、乗用車では底を擦りそうな大穴がいたるところに待ちかまえ、穴を避けるために対向車が車線を大きくはみ出して迫って来ることもしょっちゅうである。すなわち、ただでさえ、車の流れはいたって悪い。そこに、徐行運転をするゴミ収集車が割り込んだら、どうなるか。とくに半ドンのために平日以上に渋滞する土曜朝の繁華街の道路では、長蛇の列ができてしまった。

それでも街がきれいになれば納得できるが、成果はなかなか目に見えてこなかった。

そして、昨年11月29日にはさらに、ムウィニ大統領自らが、翌日より9日間にわたるダルエスサラーム市ゴミ清掃キャンペーンを命じる事態にいたった。大統領によれば、「ダルエスサラーム市、とくに市場周辺の状況は見るに耐えない。……ゴミ収集はダルエスサラーム市評議会の管轄であるが、同市評議会はその遂行に失敗し、すでに彼らの能力を越える状況にまでいたっている」。これより前に、市評議会はその事実を認めている。9月17日に市評議会議長は、ダルエスサラーム市では毎日2103トンのゴミが発生しているが、市当局は690トンしか回収できていないと公表した。ゴミ収集に117台の収集車が必要であるのに、現有台数はわずか39台であり、それも財政難のためスペアパーツ等が調達できず、稼働率が低いということである。

いうまでもなく、このキャンペーンは端緒にすぎず、清掃作業はその後も継続されなければ意味がない。しかしながら、12月18日にはすでに、キャンペーン中になくなったゴミの山が再び姿を現わしたと、新聞で報じられている。

ゴミ収集に関わるもう一つの問題は、カラスの駆除である。ダルエスサラーム市内でよく見かけるカラスは、英名Indian House Crow、スワヒリ語名Kunguru wa Unguja (ザンジバル本島ガラス)というやや小型の種類で、全体に黒く、首筋から胸にかけて灰色っぽい。いつの頃か定かではないが、このカラスは生ゴミ処理の目的でダルエスサ

ラーム市に移入されたものだという。名前からして、インド亜大陸からザンジバル本島経由で連れてこられたものであろう。ところが、予想以上に繁殖し過ぎて、悪戯までするようになった。昨年7月に、観光・天然資源・環境省、市評議会、タンザニア電力会社が共同プロジェクトとして、カラス駆除のキャンペーンを開始し、カラス1羽につき50シリング、巣あるいは卵1個に対しては100シリングを報奨金として支払い始めた。11月初旬までに、カラス5137羽、巣3219個、卵7528個にたいして51万4250シリングが支払われたという(上記の単価によると計算が合わないが、新聞報道のまま)。ダルエスサラーム在住のある若手実業家は、輸送手段と罾を提供してもらえれば、300万シリングでダルエスサラーム中のカラスを駆除すると申し出ている。

### ゴミ処理場移転問題

ゴミ収集能力の問題にもまして市評議会が頭を抱えていることは、収集したゴミの持って行き場がないことである。

ダルエスサラーム市は、20年近くタバタ地区にあるゴミ処理場を利用してきたが、ゴミを埋設するなどの措置を行なわず、山積みにし焼却するにとどめてきた。1989年にゴミ処理場周辺の住民がついに裁判所に訴訟を起こした。ゴミ処理場が住宅地域に近く、周辺住民は悪臭ならびに有害な獣・虫害の被害に遭っており、また焼却処分は有毒ガスを発生させ住民の健康を害しているばかりか、大量の煙が幹線道路のネルソン・マンデラ道路を覆い、交通事故の原因ともなっている。そのため、即刻タバタ・ゴミ処理場の使用の中止を命じてもらいたい、という訴状である。

高等裁判所は原告の主張をほぼ認め、1年の猶

予を与えて1990年8月までに他所にゴミ処理場を開設するようにダルエスサラーム市評議会に命じた。市評議会は期限までに代替地を見つけられず、さらに1年の猶予を高裁に申請し、許可された。

更新された猶予期限である昨年8月末日が近づいて、市当局が予定していたムバガラ地区キズイアニの新ゴミ処理場開設は暗礁に乗り上げてしまった。8月28日にムバガラ地区にゴミ廃棄に向かったゴミ収集車は住民のピケに遭っている。ムバガラ地区も住宅地域に近いうえに、同地区にはムトニ上水場があり、ゴミ処理場を併設すれば水質悪化の危険性があるとの反対が強かったためである。

ムバガラ地区キズイアニの使用が困難となり、市当局はあわてて8月30日に、ムバガラ地区キルングレに新ゴミ処理場を開設するまで、タバタ・ゴミ処理場をさらに3カ月間継続使用することを許可してくれるよう高裁に申請した。2年も我慢を続けてきたゴミ処理場の周辺住民は態度を硬化させ、強硬手段に訴えた。9月1日にタバタ・ゴミ処理場に通じる3本の道路でピケを張ったのである。

9月9日に高裁は市当局の猶予期間再延長の申請を却下したため、窮地に追い込まれた市当局は、同日からダルエスサラーム市のゴミ収集作業を中止してしまった。収集しても持って行き場がないのであるから、収集しようがないというわけである。

タンザニア中央政府は、この問題を解決するために9月11日に特別委員会を設置した。その構成は、水資源・エネルギー・天然資源省事務次官代行、地方自治省事務次官補、国家都市給水公社理事長、ダルエスサラーム市評議会議長であった。そして、9月12日には、市評議会を管轄する地方自治省の通達によって、市評議会はクンドウチ地区ムトンガニにある採石場跡地を新たなゴミ処理場として利用する権限を与えられ、ゴミ収集作業を再開した。市評議会は、新ゴミ処理場では、焼

却処分を行わず、ゴミを砂で覆うと発表した。

しかし、ゴミ処理場移転問題は、これでめでたく解決したわけではない。

まず第一に、クンドゥチ地区はタバタ地区と比べて市中心部より遠い。タバタ地区であればゴミ収集車は都心から3往復可能であるが、クンドゥチ地区では2往復しかできない。単純計算で、ゴミ処理能力は3分の2に低下する。これまでもゴミ収集が十分に行なわれていなかったが、さらに状況は悪化している。ちなみに、一昨年9月に現在の借家に引っ越して以来、わが家周辺の住宅街では一度もゴミ収集車を見かけていない(裏庭で焼却したり、穴に埋設したりして、自宅でゴミを処分している)。

第二に、市当局の約束にもかかわらず、クンドゥチ・ゴミ処理場はゴミが砂で覆われることなく山積みされ、そのうえ市当局によるものかどうかは不明であるが、焼却処分が行なわれ、煙は幹線道路であるバガモヨ道路を覆っている。9月後半から始まった消防署による消火活動でもなかなか鎮火せず、9月末には煙害がリゾート・ホテルを含む周辺地域にまで及んだ。

第三に、クンドゥチ・ゴミ処理場の周辺住民に事前に相談がなく、そのうえ上記のように約束違反があるとして、彼らは反対運動を組織した。クンドゥチ地区は、新興の高級住宅地となりつつあり、ゴミ処理場の開設は打撃である。1979年に作成されたダルエスサラーム市都市計画(Master Plan)では、砂採り場跡地ならびに採石場跡地はゴミ処理場として利用すると明記してあるとして、地方自治省副大臣はそのような地区に住宅を建設するほうが間違っているとの談話を発表した。しかし、上記の都市計画が閣議了解されたのは89年であり、その間にクンドゥチ地区に住宅を求めた住民はゴミ処理場の開設など夢想だにしていなかったのではないか。

早々に、ゴミ処理場周辺の住民794人が原告となり、市評議会を相手取って高裁に提訴した。原告団弁護士によれば、上記の副大臣発言にも関わらず、1979年都市計画で上げられている5カ所のゴミ処理場予定地に、クンドゥチ地区は含まれていない。これに対して、市評議会側の反論は、クンドゥチ地区のゴミ処理場は仮設であり、いずれ別所にゴミ処理場を開設する。またクンドゥチ地区へのゴミ投棄は、採石場跡地の穴を埋めて同地区を住宅用地・農用地として再生するために必要な作業であるというものである。

判決は今年1月3日に下った。市評議会の敗訴である。裁判官は、上記の市評議会の異議申し立てをことごとく否認した。市評議会は、ゴバ地区キンズディに新たなゴミ処理場を開設しようとしているが、まずもって道路開発の可能性を調査する資金を調達できるかどうかにかかっているという。

## むすびにかえて

年末年始にジンバブエを旅行し、首都ハラレの道路の広さ・穴のなさに感激し、清潔さに感心しながらも、ふうっと漂ってくるマンゴの腐敗臭にダルエスサラームを懐かしく思い出した。相当ダルエスサラーム化されている自分に苦笑したものである。ただし、今回ゴミ問題を追っていて、タンザニア人もダルエスサラームが汚いと感じていることがわかった。

もう一点、健全な住民パワーの存在に安心した。短絡的過ぎるかもしれないが、いまだ複数政党制を導入していない\*とはいえ、タンザニアの民主化

\* 脱稿後、2月19日、20日に開催された革命党(タンザニアの単独政党)臨時党大会で、複数政党制の導入が「満場一致」で決議された。今後の作業として、一党制を規定した憲法改正を4月の国会で行なうことが予定されている。

## ■ダルエスサラームのゴミ問題

のレベルをかなり評価してよいのではないか。お上が絶対的な権力を持っていて、ゴミ処理場開設を決定すれば、計画地に居住する住民が強制的に立ちのかされる、というわけではない。それどころか、住民はピケを張ってゴミ収集車を阻止し、裁判まで起こす。そして、裁判所も住民勝訴の判決を下している。

ただし、世界の最貧国のひとつ、タンザニアにはそれなりの問題点もある。

まず、ダルエスサラーム市の道路事情の悪さは、日本での想像を絶するものであり、そのためにゴミ収集車の耐久年数は極端に短いと思われる。

ついで、市評議会の行政能力の不足である。市評議会が常に理由にあげる財政難のみが、職務遂行を妨げているわけではない。タバタに代わるゴミ処理場の必要性はすでに1979年都市計画で自ら認識していたのであり、同計画での指定地のいずれかになんらかの措置を始めていれば、今回のような問題は発生しなかった。市評議会の行政能力不足については、国内他組織からも批判が出ている。9月初旬にゴミ収集を放棄したことに対して、ダルエスサラーム大学学生組織は責任回避であると市評議会を非難する声明を発表した。全国組織であるタンザニア青年組織も11月末の同組織全体評議会の実行委員会決議に、ゴミ収集もできないような非効率な市評議会を解体し、著名な実業家、都市計画専門家、学識経験者からなる委員会制度に転換するよう求める提言を盛り込んだ。

さらに、ゴミ問題には、おそらく不正支出、汚職も絡んでいる。地方自治省は一昨年度にダルエスサラーム市評議会に新ゴミ処理場開設予算として、6000万シリングを交付していた。実際にはゴミ処理場は開設されなかったにもかかわらず、上

記の6000万シリングは地方自治省に返納されていない。そして、同じく一昨年度交付されたシンザ地区道路補修用予算4000万シリングも使途不明であることがわかった。そのため、合計1億シリングの使途解明のための委員会が設置されている。また、つぎつぎに汚職を摘発し、大衆の人気の高いムレマ内務大臣は「国家公務員の全員とはいわないが、大多数は不正を行なっている」と公言している。

実は、ダルエスサラーム市のゴミ・し尿収集事業には日本の経済協力がなされている。そして、昨年末に、会計検査院の検査報告で、政府開発援助が十分に効果を上げていない事例の一つとして同事業が取り上げられた(『朝日新聞』夕刊1991年12月9日)。納税者としては十分な事後調査を望みたいが、ダルエスサラーム在住者としては、事業遂行遅滞の原因は根が深く広く、適切な助言で改善を図ることは至難の技であろうとも感じる。

最後に、ゴミ問題を追っていて出くわした耳の痛い新聞記事(Daily News, 1991年12月29日)をひとつ。その記事によれば、日本人は、ゴミ問題を非常に紳士的に解決しているという。たとえば、車を廃棄処分せず、化粧直して、タンザニアのような貧しい国に中古車として輸出し、ここタンザニアでは退官した官僚が文字どおり列をなしてそれを購入し、なかにはだまされる者もいる。古着でさえ、スーダンの着る物もない人に送る慈善に使われ、あたかも自国の不用物を他国に転嫁する効果を持つ、と紹介している。強烈な皮肉である。さきほどの、経済協力の効果の問題と並んで、考えさせられる問題である。

(いけの・じゅん/在ダルエスサラーム海外調査員)